

水の巻

兵法、二天一流では、水のあり方を根本として、勝つ方法を実施してゆくの、水の巻として当流派の太刀筋をここにしたためた。この道のすべてのことを、詳細かつ自由に筆で表現するのは難しい。たとえ言葉が存分に言い切れてなかったとしても、その説く理は自ずとわかってくるだろう。

ここにしたためたものを、一言一言、一字一字で深く考えなさい。適当にやっつけていては、道を踏み外してしまうことが多い。兵法の利を理解しようと思えば、一対一の勝負のように書かれた部分も、集団対集団の合戦のように解釈し、巨視的な観点でとらえることが大事である。この道に限って少しの見当違いが迷い道となつてやがて悪道へ転がり落ちてしまうものだ。

この巻を読んだだけで、即兵法に達するわけではない。この巻に書かれたことを自

分自身にとつて書かれたものと心得、ただ見ると思わず、習うと思わず、物真似に終わらず、自分自身の心の中から見出した利として身につくように、存分に工夫しなくてはならない。

一 兵法の心持ちについて

兵法の道では、心の持ち方として、平常心と異なることがあつてはならない。平常時も戦闘時も少しも変わることなく、心を広くまっすぐに持ち、強く緊張せず、少しも弛緩せず注意がはずれかに傾かないよう心の真ん中に置き、心を静かに流れさせ、その流れる瞬間瞬間にも、流れが止まらないように充分注意すべきだ。

身体が制止しているときも、心は静止せず、身体がめまぐるしく動いているときも、心は少しも動かず、心は身体に引き摺られず、身体は心に引き摺られない。心に用心して、身体には用心せず心に足りないものをなくして、心を少しもあまらせず、心のうわべは弱くとも、心の底の部分は強く、心を他人に読まれないようにして、身体

小さなものは、身体が大きいことによる長所短所をすべてわきまえ、大きなものは小さなものすべてをわきまえるようにする。身体が大きかろうが小さかろうが、心をまっすぐにもち、他人よりわが身がすぐれているなどと思わない心をもつことが大事だ。

心の中の雑念を払い、広々とさせ、そこへ智慧を置くのだ。智慧も心もひたすら磨き、向上させるよう努めなさい。智慧を研ぎ澄まし、天下の利非をわきまえ、物事の善悪を知り、あらゆる芸能、あらゆる道に通じ世間の人にもったくあざむかれることがなくなつた後、兵法の智慧が心に宿る。一般の智慧と比較し、兵法の智慧は特に性質が違っているものである。戦闘の場というものは、万事急展開するものだが、この兵法の道理を極め、いかなる時も動じない心というものをよく勘案すべきである。

一 兵法の身体の構え

身体の構えは、顔をうつ伏せず、仰向かず、傾けず、ゆがめず、目を見開かず、額

にしわを寄せず、眉と眉の間にしわを寄せて、目をキョロキョロ、パチパチせず、少し細めて、おだやかに見える表情で、鼻筋はまっすぐに、心持ち下あごを前に出すようにする。首は後の筋をまっすぐにし、うなじに力を込めて肩から胴体は左右のバランスを均等に保ち、両肩を下げ、背筋はまっすぐに、尻は突き出さず、膝からつま先まで力を入れて踏ん張り、腰はかがまないように、下腹をはり、脇差のさやに腹をもたせかけて帯がゆるまないようにすることを「くさびをしめる」といつている。

一般的に、兵法の構えの修行では、普段の構えを兵法の構えとし、兵法の構えを普段の構えと心得ることが大事である。よく工夫してみることだ。

一 兵法の物の見方

物の見方は、大きく広く見るようにするのだ。心眼で見る「観」と、目で見る「見」の二つの見方があるが、観の目で強く、見の目で弱く見、遠いところを近くでありありと感じるように見、近いところは遠くから大局をつかむように見るのだ。これが兵

法の見方だ。敵の太刀筋を悟り、敵の実際の太刀は全く見ないことが、兵法のツボである。工夫することだ。

この見方は、一対一の小さな兵法にも、集団での大きな兵法にも、両方応用できる。また目線はまっすぐ前を見たまま、左右の視野をなるべく広げて、両脇を見ることも大事だ。こうしたことは緊急時にはなかなか実行できないものだが、この書付を諳んじ、日常生活の中で、この見方を実行し、いついかなる時もこの見方をキープできるよう、よく鍛錬しなくてはならない。

一 太刀の持ち方

太刀の持ち方は、親指、人差し指を心持ち浮かせるようにして、中指は締めすぎず弛めすぎず、薬指、小指は締める心持ちでもつのだ。握った手の内にあそびがあつてはいけない。常に敵を斬る気持ちで、太刀をもつのだ。実際に敵を斬る際にも、この握り方をキープし、手がかちんこちんになってしまわないよう気をつける。

敵の太刀を払うとき、受けるとき、当てるとき、押えるときにも親指人差し指だけを心持ち調整するのみに、ともかくにも敵を斬るのだ、と思って太刀をとるべきだ。試し斬りの握り方も、勝負での握り方も、人を斬るといふ持ち方に何も変わるものではない。おしなべて、太刀であっても、手であっても、居着くということがあつてはならない。居着くことは、死に手であつて、居着かないことが生き手である。よく心得ておきなさい。

一 足使い

足の運び方は、つま先を少し浮かすようにして、かかとで強く踏み込むのだ。足づかいの基本は、時と場合により、大小・遅速の違いはあつても、常に歩むようにすべきだ。飛び足、浮き足、踏みとどまる足は、三つの悪い足使いといえる。

兵法の道の秘伝に、陰陽の足と呼ばれる重要な足使いがある。陰陽の足とは、片足だけで動かないものだ。斬るとき、退くとき、受けるときまでも、陰陽といつて、右

左・右左と必ずセットで踏む足使いのことだ。くれぐれも、片足だけで踏んではいけない。よく工夫してみることだ。

一 五方の構え

五方の構えとは、上段、中段、下段、右脇、左脇、以上の五方向のことである。構えが五つに分けられるといっても、すべて人を斬るためだけのことである。構えはこの五つしかない。どの構えをとろうが、構える、と意識せずに、人を斬るのだ、と思うべきだ。構えの大小は、場合により有利なものをとればよい。

上中下は定型の構えであり、左右両脇は応用型の構えだ。右左の構えは、上がつまつて、なおかつ左右いずれかがつまっている場合にとる構えだ。右にするか左にするかは、構えた場所により決まってくる。

この道の奥儀にいわく、究極の構えは中段と心得よ。中段は構えの本道である。兵法を全体に拡大して解釈すると、中段は戦鬪の陣形でいえば、大将の座である。大将

以下、あと四段の構えが準じる。よく検討してみなさい。

一 太刀の道

太刀の道を理解するということは、常時帯びている自分の太刀をたとえ二本の指でつまんで振ったとしても、太刀の軌跡と動き方を把握していれば、自在に振るうことができるものだ。いたずらに太刀を早く振ろうとするから、太刀本来の道に逆らうので振れないだけだ。太刀は振りよい程度に、静かに振るものだ。

勘違いは、太刀をあたかも扇や小刀でも扱うように早く振ろうとするから、太刀の道に反して振れないということになる。こういうのは、小刀きざみといって、とても太刀で人など斬れるものではない。

太刀を振り下ろしたら、あげやすい道へ振り上げ、横に振れば、横に戻りやすい道へ戻し、いかにも大きくひじをのばして、強く振り下ろすこと、これが太刀の道である。当兵法の五つの型を訓練し、体得すれば太刀の道が定まって、楽に振れるように

なるだろう。よく鍛錬しなさい。

一 五つの基本形、第一

第一の型は、中段の構えである。太刀先を敵の顔へ向けて、敵と対峙し、打ちかかってきたら、まず右へはずして行き違つ。また、敵が打ちかかってきたら、切つ先を返して打ち、打ち下ろした太刀先はそのままにしておき、再三打ち込んできた敵の手めがけて、下から打つ。これが、第一である。

総じて、この五つの基本形は、書付を読むだけでは、合点がいかないだろう。実地で太刀を手に取り、稽古するといひ。この五つの太刀の型を覚えれば、当流の太刀の道も悟り、どのようにも敵が打ってくる太刀筋に対応できるようになる。わが二天一流の太刀の構えは、この五つだけであるとすゆるえんである。鍛錬しなさい。